

の季節変化は黄河中流域に比べ1か月近く遅れている。二十四節気しか季節の指標がなかった昔は別として、太陽暦を導入した現在、気象学的にも体感的にも日本の季節進行と大きくずれている二十四節気が気象関係者によって使われ続けている現状を一度見直すべきではないだろうか。

### 参 考 文 献

- 内田正男, 1974: 暦, 広瀬秀雄編, ダイヤモンド社, 65p  
 気象庁, 2002: 気候系監視報告別冊第8号, 付録 CD  
 気象庁, 2003: 日本気候図2000年版 (CD)  
 倉嶋 厚, 1966: 日本の気候, 古今書院, 253pp  
 藪内 清, 1974: 暦, 広瀬秀雄編, ダイヤモンド社, 19p

## 極域・寒冷域研究連絡会のご案内

極域・寒冷域研究連絡会より, 2004年春季大会(東京)での開催内容のご案内をいたします。

日 時: 2004年5月18日(火) 17:45~2時間程度

場 所: 気象庁講堂

話 題:

### 1. 南極観測報告

「JARE45におけるクライオサンプラー回収気球実験」

菅原 敏 (宮城教育大)

「44次隊越冬報告: 南極の気象-カタバ風とブリザード-」

佐藤 薫 (国立極地研究所)

### 2. 極域・寒冷域の気候変化

「昭和基地の40年間の気象データに見られる特徴」

平沢尚彦 (国立極地研究所)

「気象庁におけるオホーツク海の海水解析」

金子秀毅 (気象庁)

「永久凍土地帯の炭素循環」

中野智子 (東京都立大学)

「山岳氷河の縮小傾向」

藤田耕史 (名古屋大学)

「大規模大気循環のここ数十年の変動」

小林ちあき (気象庁)

今回の極域・寒冷域研究連絡会の前半は, 南極観測隊報告です。先の冬の44次越冬隊及び45次夏隊にて観測に携わった方々から最新の成果を報告して頂きま

す。後半は, 「極域・寒冷域の気候変化」と題して, 観測データに見られるここ数十年の気候の変化についての講演です。最近, 極域・寒冷域の観測データの蓄積が進み, 数十年規模の変動も議論できるようになってきました。地球温暖化のシグナルが高緯度に現れやすいという議論もありますが, 実際の観測データに見られる極域・寒冷域のここ数十年の変動のシグナルについて, 観測データの解析に携わる5名の方々から話題提供して頂きます。

代 表: 山崎孝治 (北海道大学地球環境科学研究科)

世話人: 平沢尚彦 (国立極地研究所)

中村 尚 (東京大学理学部)

浮田甚郎 (コロンビア大)

高田久美子 (地球フロンティア研究システム)

阿部彩子 (東京大学気候システム研究センター)

佐藤 薫 (国立極地研究所)

本田明治 (地球フロンティア研究システム)

齋藤冬樹 (東京大学気候システム研究センター)

高谷康太郎 (地球フロンティア研究システム)

問い合わせ先:

地球フロンティア研究システム 高谷康太郎

Tel: 045-778-5526, Fax: 045-778-5707

E-mail: takaya@jamstec.go.jp